

地域におけるボランティア活動を通しての学生の学び： 「ぽかぽか交流会」の活動を振り返って

著者	久山 かおる
雑誌名	鳥取短期大学研究紀要
号	57
ページ	71-80
発行年	2008-06-01
出版者	鳥取短期大学
ISSN	1346-3365
URL	http://doi.org/10.24793/00000147



〈研究ノート〉

地域におけるボランティア活動を通しての学生の学び —「ぽかぽか交流会」の活動を振り返って—

久 山 かおる

Kaoru KUYAMA : College Students' Learning through Volunteer Activity Work
—Activities in "Pokapoka Exchange"—

鳥取短期大学幼児教育保育学科における授業「特別研究：（地域とボランティア）」を履修した学生たちが、地域でのボランティア活動の実践として「ぽかぽか交流会」を開催した。本研究は、「ぽかぽか交流会」運営に関する学生の記録物等を振り返り、学生が企画・運営する経過の中からどのような学びをしたかを考察した。その結果、学生が主体的に企画・運営したことにより社会性や、コミュニケーション能力などが向上したこと、また向上には地域の教育力も大きく影響していることが明らかになった。

キーワード：ボランティア 特別研究 コミュニケーション力 地域の教育力

1. はじめに

鳥取短期大学（以下、本学とする）は「地域と共に歩む大学」を理念の一つとして掲げている。また、「地域をキャンパス」として、教員や学生は地域をフィールドとした授業やボランティア活動を実践している¹⁾²⁾

その中の一つに「ぽかぽか交流会」がある。「ぽかぽか交流会」とは、特別研究「地域とボランティア」を履修した幼児教育保育学科の学生が、ボランティア活動の実践の場として、平成17年度から倉吉市障害者地域生活支援センターぽかぽかを拠点に、企画・運営している交流会である。

筆者はこの実践について学生に経過記録ノートの記入、そして終了後は感想文を課し、自らも学生の活動を記録していった。

本研究の目的は、学生が実践の中からどのような

学びをしていったかを整理し、考察することにある。なお、特別研究とは幼児教育保育学科2年次の専門科目として開講されるゼミナール形式の授業である。専任教員の専門分野を生かし、興味・関心に基づいて学生がテーマを設定して研究を行う。毎年「特別研究発表会」において成果報告が行われている。

2. 研究方法

(1) 研究対象と方法

研究対象は、幼児教育保育学科特別研究Ⅰ・Ⅱ（地域とボランティア）を履修した学生（平成17年度4名、平成18年度9名）の活動経過記録および履修終了後の感想文の記述内容である。その結果から学生の学びを考察する。

(2) 研究対象期間

平成17年4月～平成19年3月

の特別研究履修生が行っていくことが決定した。

3. 倫理的配慮

学生（卒業生）には、研究目的を伝え、記録の使用及び結果の公表について口頭で同意を得た。

4. 「ぽかぽか交流会」開催に至った経緯

(1) 地域を歩く～課題探索・発見まで

平成17年4月開講後から講義（・ボランティアとは・高齢者や障害者について等）や大学外に出かけ以下のことを実施した。

- ・学内のバリアフリー状況体験
- ・学生4名と共に「地域探検～地域を知ろう」と倉吉駅周辺及び市役所、白壁土蔵群へ行きアイマスクを着用し歩くなどの体験をした。
- ・倉吉市障害者地域生活支援センターぽかぽか（以下、支援センターとする）を訪問し、所長から施設の概要や地域で生活する同年代の障害者や高齢者の生活状況を聞く。

上記の講義や体験に基づいて興味・関心をもった事柄について討論を実施し、学生は自らの課題・テーマを設定していった。

(2) テーマ「ぽかぽか交流会」開催

学生からは、「自分がいつも何気なく歩いていることに気づいた」や「地域で生活されている障がい者や支援センターのことを何も知らなかった」、「保育実習で施設に行った時自宅での生活をイメージしたことがなかった」そして「おそらく同じ幼児教育保育学科の学生も知らないのでは」、「でも知るきっかけがない」などの意見がでた。「知り合うためには、交流できる場所があればよい」と意見が集約され、「学生や地域、地域住民同士が交流できるきっかけの場づくりとして交流会を開催する」を自分たちの特別研究のテーマとした。交流会開催の目的について支援センター所長に伝え、快諾をいただいた。支援センターぽかぽかを会場とし、企画・運営は本学

5. 「ぽかぽか交流会」活動状況

第1回から4回までの「ぽかぽか交流会」の概要については（表1）の通りである。内容の詳細については学生が「幼児教育学科特別研究発表会」³⁾⁴⁾において発表している。

交流会当日の参加者は第1回80名、第2回85名、第3回90名、第4回120名であった。近隣住民、心身障害者小規模作業所に通う方々と保護者、近隣の高齢者デイサービスの方々、医師や保健師、看護師など医療関係者、行政職員などであった。

(1) 「ぽかぽか交流会」運営の流れ

第1回から2回の企画・運営は平成17年度履修生4名、第3回から4回の企画・運営は平成18年度履修生9名が実施している。平成17年度と平成18年度の運営の流れは下記のようにになっている。

- 1) 企画書を作成する
- 2) 開催日の決定
- 3) 広報用チラシ作成
- 4) チラシを持って公民館長、子ども会会長へ挨拶
- 5) 広報・関係機関学生へ挨拶
- 6) 当日ボランティア募集
- 7) プログラムの詳細検討
- 8) 飾り等作成
- 9) お菓子（ボランティア・学生製作）
前日会場準備（当日ボランティアに協力依頼）
- 10) 当日運営・片付け

(2) 学生の振り返り

交流会開催後の活動記録から運営に関する学生の記述をあげ、教員の観察・実施記録から補足していきたい。

- 1) 企画書を作成する

「企画書を書くのは初めてだったので最初はどう書

表1 ほかほか交流会 概要

	開催年月日	来場者（人）	履修生（人）	ボランティア	コーナー
第1回	2005年 12月3日(土) テーマ クリスマス	80	4	14	・喫茶コーナー（短大生） ・紙芝居コーナー（短大生） 出演者 ・ギターの弾き語り（短大生） ・三味線演奏（短大生） ・しゃんしゃんかき踊り （近隣のデイサービス職員）
第2回	2006年 3月11日(土) テーマ ひな祭り	85	4	16	・喫茶コーナー（短大生） ・折り紙・絵本コーナー（短大生） ・トラディショナルチームの三味線、太鼓演奏と歌（短大、OB、教員のグループ） ・花笠音頭（近隣のデイサービス職員） ・販売コーナー（心身障害者小規模作業所）
第3回	2006年 7月15日(土) 七夕	90	9	24	・うたごえ喫茶（ギター伴奏Nさん） ・紙芝居・絵本折り紙・（短大生） ・ハンドベル演奏（短大生） ・デイサービス和 作品展 ・販売コーナー 心身障害者小規模作業所 精神障害者デイケア
第4回	2006年 12月2日(土) クリスマス	120	9	26	・喫茶コーナー（短大生） ・折り紙、絵本（短大生） ・トラディショナルチーム ・歌（手話とハンドベル）短大生 ・デイサービス和作品展 ・販売コーナー 第3回と同じ

いて良いのかわからなかった」（平成17年度学生）
「会議のために企画書を作りましょうと先生から言われても何のことかわからなかった。でも勉強になった」（平成17年度学生）
「先生からダメだしがでて何度も書き直した」（平成17年度学生）
「先輩の書いているのを見ても、プログラムも違うのでやはり自分たちで考えなければいけなかった」（平成18年度学生）
「企画書の書き方がわかってよかった。仕事をしたら書くかもしれない」（平成17年度学生・平成18年度学生）
企画書を書くという体験に学生は大変苦労し、教

員の指導のもと何度も書き直している。学生の記述にはなかったが、支援センター所長からも内容についてのご指導があり書き直しを行っている。

2) 開催日の決定

「学生と相手の予定が合わないなど日程調整が難しかった」（平成17年度学生）
「地域の行事も考えないといけないのかと驚いた」（平成17年度学生）

「お客さんのことを考えて、雪の多そうな時期は避けるなど気配りが大切」（平成18年度学生）

学生は当初自分たちのスケジュールを中心に開催日を予定したが、話し合いの中で関係する団体や地域などの行事と重なり開催日案を何度も変更している。

3) 広報用チラシ作成

「チラシを作るのが遅くなった」(平成17年度学生)
「チラシにとりたんの学生が主催していることを
アピールした方が良い」(平成17年度学生)
「地図やプログラムも書き,来たくなるようなもの
にする」(平成18年度学生)
「チラシは早く, たくさんの人に見てもらおう」(平
成18年度学生)

4) チラシを持って公民館長・子ども会会長へ挨拶

「初対面の人の家に行き, 挨拶するのはとにかく
緊張した」(平成17年度・平成18年度学生)
「実家の自治会長も誰か知らないのに, 初めての
体験だった」(平成17年度学生)
「言葉がうまく出なかった」(平成18年度学生)
「チラシを回覧板で回して貰うことになり良かった.
そういう仕組みなのだと思った」(平成18年
度学生)
「最初はうまくいかなかったが, 練習してから出
来るようになった. ちょっと自信がついた」(平
成18年度学生)
「初対面の大人と話すことは緊張したが勉強に
なった」(平成18年度学生)
「最初はちょっと抵抗があったが, お辞儀の仕方
など勉強できてよかった. 卒業しても役に立つと
思う」(平成18年度学生)

自治会長・子ども会会長宅への挨拶は, 当初支援
センターばかばか所長の同行により紹介の後行われ
た. 4回目は学生だけで実施した. 平成18年度は挨
拶に廻る役割を学生が分担を決め固定していたが,
急遽担当以外の学生を連れて行くことがあった. そ
のため, 言葉遣い, 挨拶の方法, 仕草, 語尾のイン
トネーションについて教員が指導した.

5) 広報・関係機関へ挨拶

「チラシを作るのが遅れて広報に行く時間があま
りなかった」(平成17年度学生)
「実習に行く前に, チラシは作っていたほうが良
かった」(平成17年度学生)
「先輩からの伝言で『早めの準備』とあったのに,

細かな準備計画を立てずに保育実習に入ってい
ま, 多くの人に広報できなかった」(平成18年度
学生)

第3回ばかばか交流会実施後の振り返りの後, 学
生は広報について大きな改善をしたが, その内容に
ついては後述する.

6) 当日ボランティア学生募集

当日の運営及び出し物をする学生を募集してい
る. ボランティア終了後は参加した感想をメールに
より収集し, その内容をその後の運営に活かしたが,
その内容については後述する.

7) プログラム詳細検討 8) 飾り等作成

「学生のみみんなで歌う歌は午前中にもいれたほう
が良かった」(平成17年度学生)
「手話で歌ったのはよかった」(平成18年度学生)
「七夕の願いを笹に飾り嬉しそうだった」(平成18
年度学生)
「紙縫りを作ってもらったのはよかった」(平成18
年度学生)
「あの紙縫りの技は, 幼教も負ける」(平成18年度
学生)

学生は交流会の開催時期に合わせ「ひな祭り」「ク
リスマス」などのテーマを決め, チラシ・会場の飾
り付け, プログラムの内容もそれをベースにしてい
る. 第3回交流会の「うたごえ喫茶」企画では, 事
前にデイサービスへ行き, 高齢者に歌いたい歌のア
ンケートを実施しそれを基に歌集を作成, 当日はそ
れを配布した. また, 七夕の紙縫りはデイサービスの
高齢者の方に依頼した.

9) お菓子

「支援センター所長からお菓子はボランティアの
人をお願いしてもらったが, 14種類も集まった. 人
のつながりってすごいと思った」(平成17年度学生)
「学生の手作りのお菓子もあったほうが良い」(平
成17年度学生)
「食物栄養の寮生がケーキを作ってくれて助かっ
た. すごいスピードで作ってくれた」(平成18年
度学生)

第2回ぽかぽか交流会から学生もケーキを手作りました。また「第4回ぽかぽか交流会」からは食物栄養専攻7名の学生がお菓子作りボランティアとして参加し、本学調理室を借用し4種類のお菓子を製作した。

(3) 運営改善の具体例

交流会運営において、学生は前回の振り返りや当日ボランティアの感想を活かし、いくつかの改善を行っている。

1) 広報活動の改善

平成18年度の履修生は、昨年度の履修生から引き継いだ「ぽかぽか交流会を多くの人に知ってもらいたい」と思っていたが、第3回ぽかぽか交流会では、チラシの完成はしたものの、すぐに実習となり学生の多くは県外の実習先へ行くこととなった。実習終了後から開催日までは1週間ほどであった。

当日の参加者は90名であり、1回～2回まで80～85人と大きな変化はなかった。そこで学生は第4回の開催に向けて早期に広報を重点に置いた準備計画を行うこととした。

まず交流会の様子をおさめた「第3回ぽかぽか新聞」(図1)を発行し、次回の案内チラシと共に挨拶に廻った。従来支援センター所長と同行していた場所や人へも、学生だけで出かけ参加を呼びかけ手渡ししていった。また、地元新聞社にも取材の依頼を行った。学生が配布したチラシ枚数は、第3回82枚であったものが第4回は211枚となっている。参加者については、第1回から3回80～90人であったが第4回は120人の増加となった。交流会終了後はすぐに「第4回ぽかぽか新聞」を作成し、事前に挨拶に出かけたところに結果報告として訪問し、手渡した。なお、新聞に写真を使用する際は、本人の使用許可を取るなどプライバシーにも配慮していた。

2) 当日ボランティア学生の感想を活かした改善

第1回目の当日ボランティアの感想は、①「最初何をしていたのかわからなかった。後半からは楽しかった」②「来た人になんて言えば良いのかわからなかった」③「楽しかった」④「困ったとき、みんな

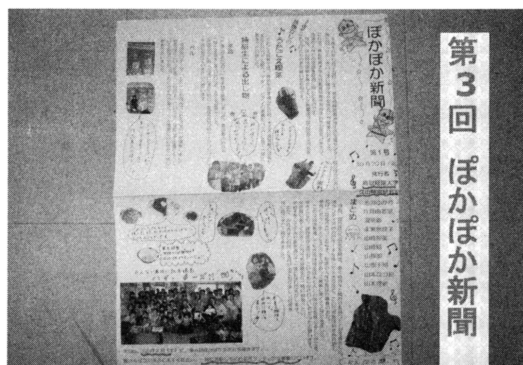


図1 ぽかぽか新聞

忙しそうで誰に聞いていいのかわからなかった」⑤「今回の交流会は学生が中心になって地域の方や障がい者の方と共に交流を広げていた。今後も交流の場や機会を学生自身が創っていくことが大切だ」であった。

上記①②④の感想を受けて、課題を話し合った結果第2回ぽかぽか交流会では事前に当日ボランティア学生への役割内容を前日と当日の朝説明した。また、履修生を1名「全体を見渡す役」として配置し、困ったときには相談できる体制をとった。

交流会終了後の当日ボランティア学生の感想は、①「楽しかった」②「最初は不安だったが、仕事の内容を聞いていたので何とか出来てよかった」③「いろいろな人と話が出来てよかった」④「学生がここまでやれるのだと思ったら、ちょっと感動した」⑤「前回は何をしていたのかわからなかった。今回は前の経験と仕事の内容がはっきりしていた」⑥「またこんなボランティアがあったら呼んで欲しい」⑦「卒業しても来たい」⑧「困ったとき聞ける人がわかっていたので良かった」⑨「疲れたけれど楽しかった」であった。

第3回ぽかぽか交流会では前年度の履修生の記録に基づいて業務内容を文書化し説明の後配布している。この会から、シフト制で昼食をするための休憩時間を設けている。

交流会終了後の当日ボランティア学生の感想は上記のようにほとんど肯定的なものであったが、学生

は第3回の体験を基に業務内容の文書を見直し、注意する点として、配慮する事や具体的な言葉の例などを加えた「仕事内容について」①アポイントを取る時の電話のかけ方：文章例、②挨拶回りの態度・言葉、③ほかほか交流会1日の流れ、④全体を見る人、案内する人と人数を数える人⑤喫茶コーナー：注文をとる人⑥折り紙・お手玉コーナーを作成し、第4回では前日に当日ボランティアを招集し、③ほかほか交流会1日の流れと各コーナーの仕事内容④～⑥がボランティア学生全員に配布された。

3) 具体例「仕事内容について」

下図は学生が作成した仕事内容（図2、図3）の文書である。〈全体を見る人〉の役割は第1回ほかほか交流会の反省をもとに作られた役割である。当日の運営の中心を担っている履修学生がプログラムの遂行や来場者の対応に追われ、全体の流れを見渡せないままにしていることを危惧した筆者の「全体を見渡す人の存在」のコメントを参考に2回目の交流会から作られた。この当日のコーディネーター的役割を持つ〈全体を見る人〉は1人の履修生が担当したが、履修生の資質に負うところも多く、特に文書化されずにその学生は卒業となった。第3回ほかほか交流会の際、学生は元履修生にその役割を電話で聞き実施、その後文書化した。

仕事内容について	
〈全体を見る人〉	
◎ 必要なもの	・カメラ ・メモ用紙 ・ペン
★内容	<ul style="list-style-type: none"> ・常に全体を見渡し、困っているところはないか、人は足りているかなど全体の流れを把握し、よく観察して対応する ・来て下さったお客さんの対応は笑顔です ・一人ひとりのお客さんの様子もよく観察する ・なるべくこられた方全員に声をかける ・お菓子をもて来て下さった方を把握し、記録としてお菓子の写真と持ってきてくださった方の写真を許可を得て撮る。名前も聞く。 ・来られたときと見送りのときも笑顔で挨拶する

図2 学生が作成した「仕事の内容について」

仕事内容について

（喫茶コーナー：注文をとる人）

◎ 必要なもの

- ・ペン・エプロン・飲み物カード・メニュー表
- ・注文表

★内容

- ・注文をとり、注文表に「正」の字で記入。
- ・注文された飲み物のカードを渡す。
- ・飲み物のカードと交換し注文された飲み物を配る。
- ・各テーブルにお菓子、ケーキを配る。
- ・各テーブルのお菓子、ケーキがなくなったら補充する。
- ・空になったコップを下げる。

★注意すること

- ・常に気を配り、各テーブルに置いてあるお菓子、ケーキがなくなったら補充する。空になったコップがあったら「おかわりはいかがですか」と聞き、下げるときは「お下げしてもよろしいですか」と聞いて下げる。
- ・注文が無い場合は、その場にただ立っているのではなく、来てくださったお客さんと話をする。
- ・注文をとるときに、テーブルにおいてあるメニュー表を持ち、飲み物は何があるか説明しながら注文をとる（かがんだ状態で聞く）

※ 笑顔で挨拶「こんにちは」「いらっしゃいませ」

図3 学生が作成した「仕事の内容について」

4) 学生の動き—具体例

下図（図4）は、第4回ほかほか交流会に向けて履修生Nが自らの動きを記録したものである。

【準備】	
10月10日	新聞作り、チラシ作り（第4回用）をする
10月23日	企画書完成、歌詞カード作り ハンドベル用（きよこの夜）の楽譜探し ハンドベル借用依頼に行く
10月30日～	ハンドベル練習開始
11月2日	チラシ・新聞配り（学内）
11月6日～17日	実習
11月25日	クリスマスの飾り作り 会議（交流会当日の役割決め） 先生と一緒に歌集準備
11月27日	挨拶まわり
11月29日	お菓子製作材料の買い物
12月1日	ベル、手話、歌などリハーサル・会場準備
【当日】	
12月2日	靴置き場担当、クリスマスカード配布 参加者人数確認、歌のときピアノ伴奏 手話、ベル演奏 片付け
12月4日	新聞作り 特別研究発表に向けて原稿作り

図4 履修生Nの記録ノートから

6. 考 察

学生の学びについて考察する。

(1) 企画書の作成

学生は、地域に出て地域の人の話を聞き、その中から課題発見し交流会を企画した。そして、「企画書を書くのは初めてだったので最初はどのように書いて良いのかわからなかった」（平成17年度学生）学生達であったが、自分達の目的や思いを伝えるためにはそれを表現する「企画書」として文章化する必要性があるというルールを知った。また、作成する際には事前に企画の全体像を想定し、相手に伝わるように記述することなどを学んだ。学生は保育実習や教育実習で計画書を作成する体験はしている。しかし、地域の中で多様な参加者が見込まれる交流会を企画することは初めての体験であった。異なる年代層、身体に障害のある方など、さまざまな地域の人を楽しんでいただくプログラムの検討、安全性も考慮した椅子や机の配置など悪戦苦闘し、「先生からダメだしがでて何度も書き直した」（平成17年度学生）と学生が振り返ったように、何度も手直しを繰り返しながら作成することができた。このことは実習においての計画書作りに通じるものである。学生自身も「企画書の書き方がわかってよかった。仕事をしたら書くかもしれない」（平成17年度学生・平成18年度学生）と振り返っているが、企画書の作成方法について学ぶことは、卒業後の仕事、行事を実施する際にも大いに有効であると考えられる。

(2) 主体的に運営する

条件の中での課題の取組」をあげている企画を実行に移すには、会議や開催日の日程調整やボランティアとの時間調整、プログラムの決定、運営方法など多くの仕事がある。「学生と相手の予定が合わないなど日程調整が難しかった」（平成17年度学生）「地域の行事も考えないといけないのかと驚いた」

（平成17年度学生）にみられるように、授業や実習を挟みながらの限られた時間の制約の中で、業務が円滑に進むように検討している。

運営するには、何をいつまで誰がどのように実施するのかなど、多くの段取りが必要である。学生Nの記録からは、スケジュールを決めそれに沿って各自が役割のなかで責任を果たしていく様子が見られた。また、ボランティアの意見である「困ったとき、みんな忙しそうで誰に聞いていいのかわからなかった」を活かし全体を見渡すコーディネーター的役割「全体を見る人」を配置し、同じくボランティアの「最初何をしたいのかわからなかった。」の意見に対しては、業務が円滑に進むように仕事の内容について説明文を作成している。学生は、交流会を開催していく中から課題を発見し、それを改善するために工夫をするなど、主体的に運営していく姿が見られた。

岩崎敏之⁵⁾は、「社会体験教育という『厳しい条件のなかで課題に取り組む』ことが教育効果をあげる」と述べているが、本学の履修生にも同様のことが言える。

(3) 広報活動の工夫

平成17年度の履修生は広報の必要性を感じ、チラシを作成した。しかし、4名の学生では交流会の準備に手をとられ多くを配布するという状況ではなかった。

平成18年度9名の履修生は昨年度の履修生の記録をもとに企画・運営した。今期の学生たちにとっては初めての経験となる第3回ばかり交流会では、「先輩からの伝言で『早めの準備』とあったのに、細かな準備計画を立てずに保育実習に入ってしまった、多くの人に広報できなかった」（平成18年度学生）と広報については不満の残るものとなっていた。

そこで、学生達は広報活動の改善を検討し実施した。その内容は、①新聞を発行する、②新聞・チラシを早期に配布する、③新聞・チラシは手渡しをするなどの工夫であった。その結果、参加者は大幅な

増加をとった。参加者が増加した理由を学生たちは「来場者がばかばか新聞を見て交流会の様子をつかむことができ、イメージが掴みやすく参加しやすくなった」「早くから広報活動に励んだことでチラシ・新聞を多くの人が見た」と考察していた。加えて筆者は「③新聞・チラシを学生が手渡した」ことが地域住民と顔の見える関係となり、参加者増加の一因となったと考える。

以上のように、学生が自分達で広報活動を工夫し、その結果、成功体験を得たことは、自信を得ただけではなく行事を運営する際の広報活動の重要性を自ら学び取ったことになる。

(4) 他者に伝える方法

企画書作成のほかにも、学生は当日ボランティアに対し仕事内容を伝える際、口頭説明だけではなく文書化した。またその内容は「喫茶コーナー：注文をとる人」にあるように「『おかわりはいかがですか』と聞き、下げる時は『お下げしてもよろしいですか』と聞いて下げる」と具体的に記述している。このことは学生がボランティア学生と接する中で、他者に考えを伝える方法を工夫するなどの学びをしていることが分かる。

(5) 他者を理解する

参加者は高齢者や心身障害者小規模作業所や精神障害者デイケアに通所される方、および地域の方や子ども達であった。学生は「お客さんのことを考えて、雪の多そうな時期は避けるなど気配りが大切」（平成18年度学生）と、車椅子の方や高齢者のことを気遣った。また、同世代の聴覚障がい者の存在に気づいた学生はプログラムに手話の歌も加えていった。

学生は歌を選曲する際、実際に高齢者にアンケートに行き、話をうかがった。また、七夕の紙縫り作りを高齢者をお願いした。作っていただいた紙縫りは「あの紙縫りの技は、幼教も負ける」（平成18年度学生）と学生の振り返りにあったように見事な紙縫りが出来上がっていた。このような交流は、核家

族化の中にあり、日常的に異世代間の交流の少ない学生にとって、高齢者や高齢者が過ごされた時代を振り返るきっかけともなっていたように思う。このように、学生は、さまざまな方と交流するなかで、他者を理解していこうとする姿勢が見られた。

(6) コミュニケーション力

交流会の企画・運営の過程で学生は多くの地域の方に出会った。「初対面の人の家に行き、挨拶するのはとにかく緊張した」（平成17年度・平成18年度学生）「実家の自治会長も誰か知らないのに、初めての体験だった」（平成17年度学生）と、初対面の大人と話をする緊張感をすべての学生が振り返っている。「言葉がうまく出なかった」（平成18年度学生）との声もあった。筆者は、学生の挨拶回りに同行したが、挨拶の言葉というよりむしろ、ノンバーバル（非言語）コミュニケーションであるお辞儀の所作、扉の開け閉め、目線などについて個別の演習の必要性を感じた。

「最初はうまくいかなかったが、練習してから出来るようになった。ちょっと自信がついた」（平成18年度学生）と振り返りにあるように、場面を想定したロールプレイングを実施し、その後、学生自身が挨拶まわりを継続して続けたことにより、コミュニケーション力の向上がみられた。このことは、「最初はちょっと抵抗があったが、お辞儀の仕方など勉強できてよかった。卒業しても役に立つと思う」（平成18年度学生）と学生の自信になっている。

以上、学生の学びを総合的に考えてみた。学生は地域との関わり、ボランティア活動「ばかばか交流会」活動を通して、社会性やコミュニケーション力が向上したと思われる。

(7) 地域の教育力による促進

学生はこの交流会の企画・運営でいくつもの学びをしてきたが、その学びを大きく促進したのが地域の方の存在である。支援センターばかばかでは、学生の成長を共に支援するというスタンスで忍耐強い

支援があった。地域への挨拶にも最初同行し、“顔つなぎ”をしていただいた。この事について学生は、「挨拶回りは、初回は支援センター所長と同行し、紹介していただいた。そのことにより、地域の方と顔見知りになり、次回からは学生だけで行く場所が増えた⁶⁾と述べている。交流会企画・運営の経過の中でも細やかな指導をいただいた。また、支援センター所長の呼びかけにより、地域のボランティアによる手作りお菓子の提供の数の多さに「支援センター所長からお菓子はボランティアの人にお願ひしてもらったが、14種類も集まった。人のつながりってすごいと思った」(平成17年度学生)と振り返り、地域のネットワークの広さを感じている。

教員とは異なる地域の中の指導者の存在は地域の教育力である。その力は、学生の成長の促進に大いに不可欠なものであった。

ま と め

本研究の目的は、ほかほか交流会活動を通して学生がどのような学びをしたのかを明らかにすることである。特別研究(地域とボランティア)履修生平成17年度4名平成18年度9名の記録物及び教員の振り返りの記述を対象に調査した結果、以下のことが明らかになった。

- ① 学生は、交流会を企画・運営する中で、社会性やコミュニケーション能力の向上があった。
 - ・企画を作成する
 - ・主体的に運営する
 - ・広報活動の工夫
 - ・他者に伝える方法
 - ・他者を理解する
 - ・コミュニケーション力
- ② 学生は、地域の教育力によりその学びが促進する

筆者は学生の学びについて述べてきたが、教員として行ってきた役割をここで述べたい。①初めに、

学生に地域の資源を情報提供し、②共に行動した。③学生の興味関心に応じ、それを深めていくために、助言を行った。④学生の課題決定後は、地域に対して今後の学生企画・運営について協力、依頼を行った。⑤支援センターほかほか所長との会議では、学生の主体性を支援するために、できるだけ示唆する形で指導していくことや学生の状況についてお互いが連絡し合うことを申し合わせ、共通認識とした。⑥企画書の作成について助言、指導。⑦コミュニケーションの実践について指導・助言。⑧交流会運営について学生が困ったとき、相談を受け、示唆するであった。

平成17年度から始まったほかほか交流会。その目的である「学生や地域、地域住民同士が交流の出来るきっかけの場づくり」は、履修生4名の特別研究発表会のテーマのように、学生が「地域を拓く」きっかけになった。いくつかの改善すべき課題もあるが、それについての報告は後のこととしたい。

今後も学生に対し、「地域をキャンパス」として本学学生と地域とのつながりをさらに広げていきたい。

謝 辞

最後に、学生を最後まで丁寧にご指導いただきました倉吉市障害者地域生活支援センターほかほかの美船智代所長を始めスタッフの皆様、ほかほか交流会に関わってくださったボランティアの皆様は心より感謝いたします。また、久山特別研究の履修生として企画・運営した学生の暖かいハートと行動力に感謝します。

引用・参考文献

- 1) 荒井優、池谷千恵、國本真吾、久山かおる、高橋千恵子「地域交流を通じた学生教育プログラムの検討—『くらし国際交流フェスティバル2006』の実践から」、『鳥取短期大学研究紀要』第55号、2007年、pp.1-11
- 2) 久山かおる「介護予防における介護予防マネジメントの課題」、『鳥取短期大学紀要』、第53号、

- 2006年, pp. 71-78
- 3) 久山研究室(幡司怜子, 政門大亮, 大島恭子, 飯島香織)「地域を開く—ほかほか交流会を通して」『平成17年度鳥取短期大学幼児教育学科・専攻科福祉専攻特別研究発表会要旨抄録』, 2006年
- 4) 久山研究室(池淵ゆかり, 瀧桐彩, 永瀬恵理子, 山崎智美, 山根歩, 山根千秋, 山本なつ紀, 山本理恵)「地域の居場所づくり—ほかほか交流会を通して」『平成18年度鳥取短期大学幼児教育学科・専攻科福祉専攻特別研究発表会要旨抄録』, 2007年
- 5) 岩崎敏之. 「社会体験教育の実践例に関する考察—SHOHOの活動状況の振り返りと今後の展開について」『湘北紀要』第25号, 2004, pp. 63-75